

●軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

私だけの人生

特別攻撃隊の訓練

出撃命令を待つ

私だけの人生 特別攻撃隊の訓練 出撃命令を待つ

岩手県 加美山 茂

特別攻撃隊には軍艦や敵機に体当たりをする高度な訓練が必要である。私は自分の小隊の隊員に特殊飛行や、編隊飛行を訓練し、ある程度隊員の技術も上がって来て、隊員は私に付いて単独で編隊を組んで飛べるようになった。私は時々、飛行場の近くにある「涸沼」に急降下して低空飛行をし、湖上の漁船が風圧で起きた波に揺れているのを眺めてきて、着陸後隊員にそのことを話したりしたが、隊員達は一番機との位置の確認が精いっぱいであり、漁船の事など気付いていた者はいなかった。

訓練飛行の帰投の時には、飛行場上空高度約一五〇〇メートルで、一番機を先頭にして約一五〇〇メートル間隔に列になり、飛行場の南端に置かれていたB29型アメリカ爆撃機の原寸模型を目標に急降下突入の訓練をした。そして引き起こしの高度や突入の角度を戦闘指揮所で指導官が見ていて、着陸して列線に戻り、帰着報告をした時には個々にその注意指摘があった。

ちなみに、この模型は私の生地岩泉の隣村の新里村出身の佐々木吉男さんが指揮して作った物だということを後日聞いた。

目標に向かって降下するということは、降下につれてスピードが上がり、それに伴って射入角度が深くなる。特に零戦の場合は機体の強度の関係で、最高制限速度三六〇ノット（約六六〇キロメートル）以上になると空中分解の恐れが出るし、舵は利かなくなるので、エンジンを加減してスピードを抑えなければならぬし、エンジンを絞ればシリンダー温度が下がりエンストの危険も出てくるという危険な作業である。

しかし特別攻撃隊にとってはそれが最後の仕事であり、いかに正確に効果的に敵艦船に突入出来るかがすべての訓練の目的でもあった。私が目標を定めてバンクを振り、反転して降下に入ると、列機は同じ位置から私に続いて降下を行い、私の機を見てすべての行動を同じようにしなければならぬ。しかし列機隊員には当初はそれが精いっぱいであり、スピードとか角度などの確認や計器を見ることなどほとんど考えられない。スピードが上がるに従い飛行機の浮力は増し、初めの降下角度が一五度くらいでも一〇〇メートル位降下対地角度が三〇度にもなり、それを確保するためには、全力で操縦桿を抑え込まなければならない。

また、引き起こして上昇に掛かっても機はスピードの関係と惰性で一〇〇メートルくらいも沈むので、それも考えて抑えを緩めなければならぬので、一番機の行動を見逃したらこれまた大変なので、まさに命懸けで一番機の後ろに付いての飛行作業であった。

その訓練も隊員の真剣さと能力が優れていたこともあって、普通では考えられないような速さで修得していった。

私の隊員のなかに、面会が許可になることに必ず来隊する方がいた。海軍は準士官以上になると、外出とか門限とかは比較的自由であり、形式的には我々特別攻撃隊員は外出禁止で即戦体制になっていたが、特別攻撃隊編成と同時に隊長、隊員は神風舎に全員移っており、巡検も一応大目に見ると言う特別待遇になっていた。

神風舎に移って間もなくのことだったと記憶しているが、隊長室にいる八人の隊長の合意で各隊毎にマフラーの色で区別するようにしようということを決めた。各隊の色は抽選で決め、主計科に頼み、当時一般では考えられないような落下傘用の羽二重を各自に一反あて計五、六人分を支度してもらった。さらにこれを各隊毎に決めた色に染めてもらい、出来上がったマフラーを隊員に渡した。今にして思えば汗顔の至りであるが、二十歳過ぎたばかりの、しかも既に死を覚悟の訓練を受けている若者が、他では考えられない一時の派手な服装に照れたり、冷やかしかつたりしながらも各隊の結束が一段と固まったような気持ちになった。

各隊毎にそのマフラーを着けて集まり、祝の宴を開いて一騒ぎしたこともあった。

翌朝一番に飛行作業に出た第二のS中尉が急ぎよ戻って来て「おい、皆聞いてくれ、今飛行場に行く途中でT大尉に呼び止められ、そんな派手なカラーマフラーを使用するのは婆娑しやばけ気たっぶりでもっ

てのほかだ、即刻廃棄しろと言われたがどうしたらいいかな」と困惑顔で皆に相談を持ちかけた。當時は「上官の命令は天皇の命令と考えて絶対服従すべし」ということになっていたので、全員がそのまま仕方なくそのカラーマフラーの使用は中止し、チェストの中にしまいこむという出来事があったのが思い出される。

神風舎には面会室があり、平日でも飛行作業に支障の無い限り面会は許可されていたので、小隊長の秋元の所には彼の大学の同級生の女性が、また第二小隊の隊員の所には母親と娘さん、第八小隊の隊員の橋本の所には、私が台湾で鈴木孝一少尉から頼まれた物を届けた時に、案内して一緒に行った家のお嬢さんが、というような面会者が特に目立つくらい来ていた。

秋元と母娘が面会に来ていた笠間少尉から「十五日に結婚式を挙げたいので、手続き等について万事よろしく頼む」と言われ、驚くと同時にそのことに疑問をも感じたので「我々の現在の任務では、後に問題を残す事にならないか」と念を押したが、彼らは「きちんと事情と内容を話し合った末に決めたことなので問題はない。指導官に話して了解をいただき手続きしてくれないか」とのことであった。

今更何を言ってもどうにもならないようなので、私は小林大尉の所に行き事情を話し、私としてとるべき行為について指導を願ったところ、大尉はにこやかに微笑みながら答えてくれた。「機密とは

言いながら、話し合つて了解して決めたということならいいじゃないですか。互いに事情があると思
いますから、ただちに上司に申し上げて許可をもらいましょう。許可が出次第連絡しますからそれま
で待つて下さい」との事だった。

間もなく許可になり、確か十四日に彼らは周りの者に冷やかされながらにこやかに上京して行つた。
十五日には東京出身の隊員達が数人外泊許可をもらつて上陸していた。海軍では航空隊も一応艦と同
じに考えて、隊外に出ることを上陸と言つていた。

東京空襲

三月十日に大変な事が起こつた。

その日、東京はB29爆撃機の大空襲を受け、被害甚大で、その炎がはるかに離れた茨城の筑波空か
らも見えた。情報でそれを知り、また航空隊でも迎撃体制で即時待機の命令が出た。

局地戦闘機の「紫電改」や「五二丙型零戦」等が格納庫から引き出され、全弾装備し、エンジンを
回し、搭乗員は全員戦闘指揮所につめ、整備員はいつでも発進出来るようにして明け方までまんじり
ともせずになっていた。しかし出撃の命令も出ないままで一夜を過ごした。攻撃隊は地上の応援や当直勤務
のみだったが、私は秋元と笠間のことが心配で電信室と当直室に行つて情報を聞きながら朝まで眠れ
ないままに過ごした。

常磐線の列車も遅れたりはしていたが、通常通りには走っていた。十五日夕方、東京から帰隊していた隊員もいたが、朝帰る予定の者は帰隊時刻になっても現れなかった。

心配しながらも小林大尉に事情を話し、連絡がつかないまま約束の帰隊時間を待つことにした。朝帰る予定の隊員が昼近くに到着し、神風舎の隊員は皆彼の周りに集まり、無事を喜びつつも昨夜の東京の空襲の様子を聞いたが、そのありさまたるや大変なものだったらしい。いまだに炎が納まらず、被害などはどのくらいなのか想像もつかないし、市内の交通も通信も電気も駄目になり、ようやく列車に乗って来たとのことであった。秋元の家付近や笠間のことなどは全然分からないとのことで、心配は納まらなかった。

夕方になっても帰って来ず。夜になり心配はつのり、小林大尉からも問い合わせが来たりと全く居ても立ってもいられない状態のところ、二人はそろって帰ってきた。秋元の軍服は汚れ切っていたが、笠間の方はちゃんとしていた。また皆が彼らの周りを取り巻いた。

秋元の話はこうだった。「夕方から空襲が始まり、そのうちに終わるだろうと思っていたがますますひどくなり、家の者も取る物取りあえず、とにかく防空壕に待機した。結局、家も家財道具もすべて焼けてしまい、結婚式どころではなく、家族が無事だったことがせめてものことと思わなければならなかった。周りでは怪我人や犠牲者が多く出たようだった。とにかく大変で結婚どころではなかったし、短剣を下げて来ただけでも良かったと思っている。

心配掛けていると思ひ連絡を取りたかつたが、何ともならず本当に申し訳なかつた。列車から降りた所で偶然笠間少尉と一緒にになり、お互いの無事を喜びつつ、駆け足で帰隊した」と語り、本当に疲労困ばいのありさまだった。

笠間少尉の方も結婚式は出来ず、こちらは自宅の庭にある防空壕の中で一晚過ごし、上野まで歩いてようやく列車に間に合つた。列車は戦災者で大混乱、車中は身動きも出来ないようなありさまであつた。駅に下車してはじめて秋元に気付き驚いたと言つていたが、二人とも大変な出来事だつたが無事帰つて来たので、まず小林大尉に報告に二人を連れて行つた。大尉も昨夜から心配していたと言われ、ホツとしたような笑顔を見せてくれた。

翌日から再び苛烈な訓練が始まり、東京大空襲についての情報が次々と入つて来た。来襲したB29は硫黄島から飛来したらしいとのこと、無差別に一般市民に大被害を与えた惨状を聞いて、親兄弟のため、国のためと、隊員全員はますます敵愾心を奮い立たせ作業に励んだ。

変わったことと言えば、秋元夫人がしょっちゅう来隊するようになり、従兵と共に私の身の回りのこともいろいろ世話をしてくれた。現れるとまず最初にいつも「加美山さんの机はいつも汚れていますね。お金ぐらひはキチンとしておきなさいよ」と言つて、私の机の上を片付けて、引き出しの中も整理してくれる。昔から海軍にあるおかしな言い伝えの「海軍士官は金勘定はするな」と言う事が性に合つたのか、給料などは封筒に入れたまま放置してあり、何かの支払いもその中から従兵が適当に

取り出して払い、釣銭等はそのままにしておくというありさまだったのを、秋元夫人はすっかり計算してくれ、最後には「少しは秋元を見習いなさいよ」等と説教なんかをされたりし、むしろそれが楽しく思われるようになっていた。

その後戦局はますます急迫し、沖縄戦線は一刻の猶予もならない事態になり、我々の訓練も当初の四月末までに完了の予定だったが、それまでの余裕がなくなった。

三月二十八日に新たに十三期から十三人、十四期から二人、予科練出身者から五人、そして海兵七十三期の二人が加わり編成替えがあった。

編成は第一筑波隊から第一三筑波隊までとなり、私は第一二筑波隊の隊長ということに決定となったが、私の隊は前の第七がそのままだったので、その晩、我が隊と一緒に出撃出来ること、「死なば諸共」を確認しあった。そして隊がそのままだったことなどのお祝いということで食堂の一角で宴席を催した。

四月に入ると、沖縄の戦線が特に熾烈を極め、菊水作戦に向けて航空隊や艦隊が活動を始め、筑波からも第一から第九筑波隊までが戦闘機で中継基地の宮崎県富高基地に進出して行った。

第六の椎木少尉の場合は、出発前日、父親が彼の嫁さん候補を同道して面会に来隊されて、明日出陣と聞いて驚いておられたが、指揮官の特段の計らいでその晩は特に外泊が許可になり、親子婚約者が一緒に旅館に泊まられた。その時どのような話があったか推察の域を出ないが、翌朝離陸した飛行

機には、その女性から贈られた人形が彼女に代わり彼の座席に飾られ、彼女と父親や戦友達に送られて編隊を組んで南の空に消えていった。

いつまでも立ちつくして呆然としている新婦と、泰然とした態度で周りの人々に挨拶している父君の对象的な、しかしながら、その心の中で惜別の気持ちを抑えていることが私たちには分かるだけに声を掛けることも出来ず、見守るだけだった。

四月六日に鹿児島県の大隅半島の鹿屋から沖縄の敵機動部隊撃滅を期して出撃して行った椎木少尉の座席には、その人形があったと見送った戦友が言っていた。

この出撃は菊水一号作戦の一環であり、私の学生時代の同級生・福島正次少尉や、台湾で指導した石橋申雄中尉が出撃戦死し、その報が筑波にも届き、いよいよ我々にも順番が遠からず来るという覚悟をさせられた。

昭和五十年ごろ、東京都江戸川の福島正次少尉のお宅に在京の戦友とお伺いしたとき、後を見ておられるのは元次さんと言う弟さんで、その正次少尉の兄も沖縄で戦死された。私や正次少尉より二歳下の元次さんも、あの当時に海軍に在籍し、私たちより飛行時間も多い爆撃機の搭乗員として活躍しておられ、正次少尉とも面会したことがあったと言っておられ、仏壇の彼の遺影は空しいけれども海軍大尉となっていた。

その後残った隊員はいつ出陣の命令が出るかと気にしながら、ますます訓練に精を出し、またお互

いの連携を深めるためということで、毎晩のように宴会を各隊ごとに行い、だんだん酒量が増え、私も相当な酒豪の仲間に数えられるようになったが、飛行作業で体が疲労しきっているために、アルコールの助けも借りて熟睡し宿醉することもなかった。指導官の小林大尉には「少し無茶過ぎないか」と注意されるくらい全員が作業に励んだが、特に事故もなかった。

ただ、燃料の不足により飛行時間が制限されたり、ガソリンにアルコールを混合して使用したためエンジンのプラグの汚れがひどくなり、搭乗員も整備員も大変に苦労が重なった。そのため危機感が一層強まり航空隊全体の緊迫感はいよいよ高くなっていった。

四月六日には菊水一号作戦で第一筑波隊として福寺薫中尉ほか石橋中尉、福島、椎木少尉を含む十七人が沖繩に向け出撃、全員戦死。十二日には菊水二号作戦で第二筑波隊が熊倉中尉、青森出身の一の関少尉、予科練出身の新井二飛曹が、十六日には菊水三号作戦で海軍兵学校七十三期の中村中尉、由井少尉ほか五人が第三筑波隊として全員戦死との報が入り、残留隊員はその報を聞く度に高まる感情を抑え、冥福を祈りその功を称えた。そして次に来るべき自分の運命の事を忘れるべく痛飲して、数日前に別れ、既に軍神となった友のことを語り合い、お互いに気持ちを励まし合った。

四月二十六日、いよいよ第一〇、一一、一二、一三の筑波隊が富高に転出することになった。しかし隊員の搭乗する戦闘機の調達が間に合わず、富高まではダグラス輸送機で移動することになった。

その日は本来なら秘密のはずであるが、出発を見送るために秋元夫人や隊員の関係者が来隊していた。私は秋元夫人から「貴方は冷酷な人ですね。場合によってはこれが最後になるかもしれないのに、家の方には知らせなかつたんですか」と言われたが、私は返事をしなかつた。

私が分隊長をして世話をした予備生徒達が集まってきていろいろ面倒を見てくれて、「分隊長の私物等の整理や家への連絡等の残務は、すべて責任を持ってやるから安心して任せて下さい」とまで言ってくれた。秋元夫人も言ってくれたが、私は彼らに頼むことにした。

当日、航空隊司令や飛行長、小林分隊長、整備員、予備生徒、私達を世話してくれた従兵と、偶然来合わせたことになっている家族に見送られ機上の人となった。私達を搭乗させてくれた機長から「この飛行機は貴方たちの戦闘機とは違い、戦闘能力はゼロでありスピードも遅いので、グラマン等に襲われるとどうにもならないので、皆さんも十分に見張りに協力してほしい」と念を押され、いよいよ戦場に出るんだなど、今までとは違った緊張感に全員の顔が引き締まったように感じられた。

見送りの人々の海軍式の「帽を振れ！」の見送りを受けて、筑波山を後に高度約千メートルで霞ヶ浦の上を飛び、焼野原となった東京上空を感慨無量の思いで通過し、箱根を越え静岡から伊勢湾、鈴鹿、奈良、そして東京と同じように空襲による被害を受けた大阪上空から瀬戸内海に入り、一路日向灘から宮崎県富高を目指した。

当日は天気晴朗で絶好の飛行日和であり、一同は飛行による眼下の風景を眺めるより、いつどこか

ら襲ってくるか分からない敵機に対する警戒見張りのため緊張の連続であった。

機長から「富高に着陸する」との合図があり、幾らか安堵して着陸旋回している下の飛行場を見ると、滑走路は爆撃による弾痕の穴だらけで、着陸が大変だと思われたが二機とも無事着陸し、富高に全員降り立った。驚いたことに筑波から零戦で飛び立った仲間の何人かが目を輝かせて懐かしそうに迎えてくれ、手を握り合い再会を喜びあった。後で聞いたが、こちらに来てから新たに編成されたため後回しにされて残っているんだと言っていた。

居住区は防空壕内に決められたが、壕内には集会所もあり、十分な広さがあり割合整備された設備であった。残留隊員や従兵に手伝ってもらいダグラスに積んできた身の回りのものを壕内の居住区に運び、そのうえで壕から出て庁舎前で整列、岩城副長に着任の申告を行った。湯野川大尉から今後のことについて諸注意、指示を受けた後、残留部隊員から庁舎の食堂で当隊でのいろいろな仕来りや隊風を聞かせてもらった。

特に副長は「ガンさん」と呼ばれ、航空隊内でも名の通った荒武者であることは承知していたほうが良いと付け加えていた。

私達はその時点から筑波航空隊から「七二一空三〇六飛行隊」に転属になり「第一二筑波隊」ということになったらしいと終戦後に聞かされたが、当時はそんなことは気にも留めなかった。

ただ富高には神雷部隊がいて、これが特攻の集団であり、特別何だか知らないがすごいそうだと

うことは天下に響いており、戦闘指揮所には「至誠尽忠」と「菊水の幟」が常に風にはためいているのが印象的だった。

富高は筑波と違い、時々敵機動部隊が太平洋から艦載機による空襲を掛けて来た。

初めて見るロケット弾で、掩体壕内の飛行機を攻撃する様子を見たいと、壕内にいた搭乗員が防空壕の居住地に殺到した時、何と敵襲の最中にガンさんは機銃を防空壕の入口に向け、大音響で「こんなことで貴様らを怪我させるわけには行かない、出てくる奴は俺が相手だ。皆大死にはいかん、引込め。ロケット弾は壕内にも入るぞ、入口付近は駄目だ、もっと引込むのだ。早くしろ、急げ」と、自分の危険をも顧みず、本当に今にも機銃を壕の入口の隊員の足下に向けて発射しそうな剣幕での怒号に、一同は壕の奥に退避した。

私はこの時初めてロケット攻撃を見たが、これまでの艦載機の銃撃とは違った効果の恐ろしさを感じさせられた。そしてガンさんに対しては大変な畏敬の念を抱いていた。そして戦後亡くなられるまで、靖国神社の慰霊祭などでは思いもよらなかった温顔で我々にお会いになられるお姿に、心から尊敬の念を抱き、また、お目に掛かる時には声を掛けていただいていた感激していたものです。

今私の手元には、副長岩城邦広中佐の旧海軍第七二航空隊に在隊したことを確認していただいた書面があり、厳しかったガンさん、そして好々爺の靖国の岩城さんをしのぶ思い出を込めて私の枕頭に掲額してある。

私は神風舎に移つて以来、家には全く手紙を出さなかつた。それは当時の事情からすると、盛岡から茨城県の友部まで来るといふことは、切符の購入から道中の混雑や空襲による危険、残つた弟妹のことを考え、また会つた後の別れのことを考えるとどうしても来てもらいたくなかつた。それに二月には友部の旅館に弟達と両親が来て面会し、事情は十分に理解してくれていたと考えていたからである。

また、私達が富高に出発した後に、予備生徒達は筑波が実施部隊に編成替えのため谷田部空に転属になつたが、彼らは私との約束を守り、私の残した私物等を整理して、谷田部空に私の父母を呼んで渡し、かつ全員で接待してくれたとのこと。その光景を、後に有名な画家となつた野田健郎生徒が書いてくれたりして心から慰めてくれたといふことを、終戦で帰つた後に、父母がそのとき見ながら感激して語るのを聞いた。

また数年前にその絵をかいとくれ、その後、海外まで名が知れ、当時の生徒長だつた画家に熊本で会い、当時のことをしのび、二人で語り明かした。いろいろ思い出し、彼のお得意の店で、当時に帰つたように私も杯が進み、マダムも付き合つてくれて朝方まで話が尽きなかつた。しかしその彼も今は鬼籍に入り、昭和二十年五月に彼のかいた絵だけが今も当時の思い出を留めている。

先日「零戦会」で当時の生徒仲間に出会い、その当時の話をしたら、昔のことは忘れていたが「そうですか。彼は亡くなりましたか。私は彼のために、しばらくは売れなかつた当時の彼の絵を相当買っ

て協力しましたよ。彼は国内よりイタリアで有名でしたし、実家も良い家だったんですがね」と述懐していた。

昭和二十年、富高に着いた当時は飛行機の割り当ても決まらず、また特に訓練もなく、野球やバレーで運動不足を補い、また隊内を流れている川で釣りをして、いつ出るか分からない出撃の命令に緊張の時を過ごしていた。時には海岸に出て潮干狩りに興じたこともあった。

私はその後、隊員に割り当てられた「三二型零戦」の試飛行に上がったたり、隊の副直将校に立ったりで忙しかったが、結構野球やバレーも楽しんだ。隊員の中には職業野球の選手もいて投手をやらせると普通人には全く手も足も出ないような剛速球で手玉に取られるありさまだった。ちなみに我が隊の笠間少尉は大学で剣道五段の猛者であり、佐藤少尉はこれまでテニスでは人に知られたプレーヤーであったし、また空手で名を知られた者もいた。この富高には旬日しか滞在しなかったが、種々思い出の多い土地でもあった。

昭和二十年五月、富高空の防空壕内の居住区の集会所で隊員達と談笑していたところに、午後七時頃だったと記憶しているが、当直兵が「筑波隊の先任の方に当直室まで来ていただくようにとの当直将校からの伝言です」と言ってきた。

その場には筑波から一緒に来た秋元や橋本とか十四期予備学生出身の搭乗員も数人いた。「用件は

何だ」と聞いたところが「なんでも町田少尉の家族の方が面会に見えられたようです」とのことだった。

そこにいた隊員は皆息をのんだ。町田少尉は既に鹿児島県の最前線の鹿屋基地から沖縄に向けて出撃したという情報が入っていたのであった。彼は十四期の予備学生の士官だったので、その場にいた同期の連中に誰か行ってくれるように話したが、その場にいた者は皆しり込みし、結局筑波隊の先任士官ということで、私が連絡に来た兵の照らす懐中電灯の明かりに足下を照らしてもらいながら当直室に行った。家族の方に何と声を掛けたいか、またどのように説明したいか、全く気が重くなり、二十一歳の若年士官には無理な任務だったと今にしては考えるのであるが、胸の痛くなる思いで当直室に入った。

当直将校は湯野川大尉だった。「加美山少尉。大変な任務だがよろしく頼む。応接室に町田少尉のお母さんと妹さんが来ておられる。会ってあげてくれ。まだ何も話していないからよろしく頼む」と申し渡された。私は当直将校のオブザーバーとして列席するつもりだったが、私だけでお会いするということは全く大変なことになったと思ひ、返事が出来ず、しばらく呆然としていたような記憶がよみがえってくる。

薄暗い廊下からノックしてドアを開けて応接室に入っていくと、部屋の中には女の方が二人おられた。私がドアを開けたので私を見て椅子から立ち上がったが、気が抜けたように再び椅子に腰を下ろ

し、私に「兄はまだですか」と声を掛けてきた。私はギョツとして瞬間声が出なかった。

テーブルの上には当直将校の心尽くし、当時は一般ではほとんど見ることもできないミカンの缶詰とジュースが載っていたが、手が付いておらず、目の前に出てくるであろう兄を、息子を待ち兼ねている様子が見えて、胸が痛んできた。後ろ手にドアを閉めて私は部屋に入ったが一瞬ものが言えなかった。

五十歳を過ぎたと思われるお母さんと二十歳ぐらいの娘さんが、私の閉めたドアの方をジツと見つめて、兄・息子の現れるのを待ち構えている姿を見ては、何も言えないのが今考えても当たり前前だったような気がする。

「実は、町田少尉は鹿屋から沖繩に向けて出撃された模様です」と、最も言いづらいことを思い切つて口にしたが、親娘の方々はその意味を理解できなかったようであつた。不思議そうにまなざしで私を見返し「いつになつたら、どこに行つたら会えるんですか」との質問に、ますます私は言葉を失つてしまい、返事どころでは無くなり、ただ二人を見ていただけだつた。

親娘は無言でいる私を不思議そうに見つめていた。ようやく「私達でなければ会えない所に行かれましたし、私達も近日中に行くことになっております。その時はあなたの方のことをお伝えします」と話したが、もちろん何のことであるか二人にはその意味は分かるはずが無く、再び疑問の目を私に向けて、説明を求めていた。

私は思い切つて言葉をのどから絞りだした。「町田少尉は、沖繩で敵艦に体当たりして特攻を掛け、靖国神社に行かれました。私達も早晚同じく靖国神社で会うことになっていきます」と一気に話し、言葉のみ母娘の反応を見守つた。

少し時間がたつて私の話が理解できたらしく、二人は驚いたような様子で顔を見合せており、娘の方は声を殺してむせんでおり、母親は天井を見上げ唇をかんでいたが、「分かりました。道教は戦死したということですね」と毅然とした声で言われて私を見返された様子には、私の方が戸惑うようありません。当時、当時のいわゆる「軍国の母」を目の当たりにした感激を覚えたことを思い出す。

私は彼が体に似合わないような声で詩を吟じたことなど、筑波航空隊と一緒にいた時の思い出などを話した。母親は相づちを打ちながら聞いてくれていたが、恐らく何も耳に入らなかつたのではないかと思われた。

その晩は富高の旅館に泊まり、翌朝の列車で帰っていたくように、当番の兵に宿と切符の手配をさせ、宿まで私が暗い道を送つた。何とも言えない気持ちで隊に帰り着き、宿に送り届け、切符の手配もしてきた旨をY大尉に報告した。

そして、もうこんな役は御免ですと言うつもりでいたら、Y大尉が何となく口ごもりながら、言わずらそうに「筑波隊の林少尉に御両親が面会に来ておられるから、すぐにお会いしてくれ。お待ちかねだと思ふよ」と話されて、当直室から出て行かれた。この時の私の気持ちは全く言葉では言い表わ

せない、情けない泣きたくなるようなものだった。私は仕方無しに重い足を応接室に運んでドアをノックして、遮光幕の薄暗い灯の下で、自分の息子の来るのを待つておられる林少尉の御両親の前に入っていった。

町田少尉のお母様より年長の少し腰の曲がりかけたように見受けられる年配の方々に、町田少尉の時と同じように「静馬はまだでしょうか」と心細そうな声を掛けて来た。「林少尉はもうここにはいません。鹿屋基地に転出して沖繩攻撃の特攻に出たようですが、はつきりしたことは分かりませんが」と、一気に命令受領申告のように声を出したので林さんたちは驚いたようになっておられたが、一瞬間を置いて明らかに肩を落とし、二人で顔を見合わせて声も出さずに涙ぐんでおられた。

「宿に御案内しますが、当地は空襲が激しいので、朝早い汽車で出発されたほうが良いと思います」と申し上げて、町田少尉の家族を送った道を再び足を運んだ。林少尉の御両親は町田少尉の家族より痛ましく、トボトボとねぎらい合いながら歩を運び、宿の部屋は町田さん達とは襖を隔てた隣室であった。

町田さんと林さんを引き合わせて、私は早々辞去して隊に帰りY大尉に報告したら、「いや誠に苦勞さん。本当に大変な役をやってもらった」と優しくねぎらいの言葉をかけてくれた。私はようやく解放されたような気持ちになり、居住区の防空壕に帰って一休みしていた。時間は夜の八時頃だったと思う。

鹿屋から来た下士官搭乗員が筑波隊員の情報を伝えに来てくれた。その中で林少尉が任務や隊編成の都合でまだ基地に残っているとのことだったのが私を驚かせたり喜ばせたりした。私は早速これを林さんに知らせてやりたいと思ったが、隣の部屋にいる町田さんの方は既に出撃して戦死したことが分かってはいるだけに、何と話したらいいか、これがまた一苦労だと頭を痛めた。

しかし出来るものなら林さん方を一目でも息子に会わせてあげたいと思い、再び当直室に行き当直のY大尉に訳を話し、自転車を借りて夜道を宿まで飛ばして行った。

今なら電話で用は足りるのであるが、当時はほとんど電話などはなく、結局行って話すより仕方がなかったのであった。宿について帳場に声を掛け、林さんご夫妻はどうしているかと女将さんに聞いたら「食事を運びましたがお上がりにならないし、部屋に入られたきりです。旦那様の方は脚半も取らないで机に向かい合ってたままで、本当にお気の毒で声の掛けようありません」と言うありさまだった。

私は急いで階段を駆け上がり声を掛けて障子を開けたら、女将さんの言葉のとおり林さんたち老夫婦はテーブルの両側に二人向かい合って誠に寂しげな姿でポツネンと座っていた。「林さん。静馬さんはまだ鹿屋にいるそうですね」と私が声を掛けたが、その意味が飲み込めなかつたらしくすぐには反応がなかった。

しかしその顔が明るく輝いて「加美山さん本当ですか。会えるんですか」と声を弾ませて二人で顔

を見合わせながら問いかけてきた。

「日豊線が空襲のため途中連絡が途絶えているようで危険ですが、行かれるならば切符等は手配しますけれども、戦場に入られる危険もありますので、私はこのままお帰りになることをお勧めしたい」と申し上げた。隣室から声がかかり、障子を開けて町田さん親子が入ってきた。「林さんはまだ生きておられたんですか。うちの兄はどうなつたんですか」と一番恐れていた質問が投げかけられた。「攻撃に参加して靖国に行かれたようです」と辛うじて返事をしたが、それを聞いて町田少尉の妹は「あんまりにも不公平だ」と母親に抱きついて泣き出した。

母親は毅然とはしていたが言葉には表わせない情景だった。町田さんは林さんに鹿屋に行くように勧めていたし、林さん達もそのつもりはしなかったが、私は熟慮するように申し上げて、急いで隊に帰り子細をY大尉に報告して居住区に戻った。そして筑波から同行してきた隊員達に大変だったこの出来事について話した。皆も何となく無口になり互いに顔を見合わせながら私の労をねぎらってくれた。しかし私は朝まで眠れず、翌朝早く宿に聞いたところ、町田さん親子は福岡に帰られ、林さん夫婦は張り切つて途中徒歩連絡を覚悟のうえ、普通なら二、三時間で行ける所であるがいくらかかろうとも宿の女将が好意で作ってくれた握り飯を持って宮崎、都城を経て鹿屋に行くこと喜び勇んで出発されたこと聞き、そのことがまた心配の種となった。

同期の戦友岩田さんの当時の日記によると、

「五月十四日（月）夜十一時に筑波から佐瀬恒男、小林金十郎、田中正男（岩田）、島崎、新井の五人が富高基地に到着、当直将校湯野川大尉、副直将校加美山少尉に迎えられた」と書いてある。

これと前後して谷田部空から第十四期予備学生出身の内藤少尉ほかの搭乗員も到着した。富高では飛行作業よりは、バレーとか野球を楽しんだ記憶のほうが頭に残っている。私は背が高いのでバレーには参加したが野球には補欠要員で、専ら玉拾いとか塁審役くらいだった。野球用語も「ストライク」は「よし」とか敵性語はどうということもなく、多いにハッスルし、出撃待機中であることも忘れて熱中したものだ。

昭和二十年五月十七日、基地副長の岩城中佐から呼び出しがあり出頭すると「菊水作戦に参加出勤するために、明朝鹿屋に移動、鹿屋基地の指示によって出撃するように。なお隊の編成は四機とする。しつかりやってくれよ」と命令と激励を受けた。来たるべき時がついに来たと頭の中が白くなるような思いがし、少し足が震えるような気がした。

「加美山少尉は部下二人とともに明朝鹿屋に移動し、出撃に備えます」と答えて居住区に帰り、急いで同行する隊員の矢定清九郎、佐藤国三郎、内山聿郎少尉と小隊長秋元少尉、笠間、橋本、青戸少尉の第十二筑波隊として常に生死を共にと誓い合い、行動を共にしてきた隊員を隊舎の食堂に集めた。

命令のため一緒に行動することが出来なくなったことを説明し、いずれ靖国で会おうと話し、その夜は防空壕の中の集会場で他の筑波から来た隊員も加えて賑やかに騒いだことを覚えている。

その時、笠間少尉の夫人がお母さんと一緒に面会に来ておられ、町田さん達と同じ宿に泊まっておられたので、筑波を出てからの私物、と言っても一カ月足らずの間なので、皆も数枚の写真や最後まで思つて書いた手紙あるいは日記のようなものを故郷に送ってもらえるようお願いした。

昭和五十五年頃、戦後初めて笠間さんに会ったが、その時富高で頼まれたものは、東京に帰った直後空襲で家と共に焼失してしまい、何とも申し訳無いと思いつながらそのままにして、おわびもしないでいて申し訳が無かったと言われ、わざわざ電話に奥様も出られて当時のことを話して懐かしがっていた。その笠間氏も昭和五十八年鬼籍に入られた。